

西宮貝類館の見学

高山壽彦



写真1: 入口

5月下旬に兵庫県西宮市にある西宮市貝類館に行ってきました。この貝類館は、西宮市の人工島・西宮浜の一角にあり、約2,000種、5,000点の貝類を展示しています。

日本の貝類研究者の第一人者、日本貝類学会の創設者の一人でもあり、貝聖とも称せられる黒田徳米氏（1886-1987年、1947年に京都大学より博士号を授与）の膨大な標本・資料が、博士の死後、散逸してしまうのを防ぐため、菊池典男氏（1915-2013年）により、西宮市に市立の貝類博物館の建設が提案され、1999年に開館の運びとなりました。

菊池典男氏（元・西宮回生病院院長）は西宮に生まれ、幼少時から兄の武正氏とともに貝類を採集し、兄弟の夢はいつの日か貝類の博物館をつくることだったといえます。戦後、奄美群島は一定期間、アメリカの施政下にあったこともあり、劣悪な医療環境が続いていました。菊池兄弟は、1955年から10年余り年1回1ヶ月程度、無料診療に奄美大島に通う傍ら、医療器具とともに、潜水用具やドレッジを運び込み、診療の合い間に亜熱帯の貝類の採集・観察を続けたといえます。

典男氏は、1965年に菊池貝類研究所を設立、翌1966年、戦前から、貝類の収集・研究の指導を受けていたといわれる黒田博士夫妻を京都から西宮に招聘し、西宮回生病院の敷地内に、博士の研究室・資料室をつくったそうです。“貝の神様が京都から西宮に来た”ということで、阪神貝類談話会の活動が始まりました。

兄・武正氏の死後、1984年に、典男氏はそれまでに収集した約8,000種の貝類を収蔵する



写真2: 展示例



写真3: 入手資料

菊池貝類館を開館しました。

2013年、典男氏のコレクションは、兵庫県立人と自然の博物館とともに、西宮市貝類館にも寄贈されたことで、師匠の黒田博士の遺品と再会することになったそうです。

展示は、『大西洋の貝』、『インド・太平洋の貝』、『日本の貝』、『海にすむ貝類』、『世界の陸産貝』、『陸・川・池にすむ貝類』といったテーマごとの標本と説明パネルを主体とし、これらのほかに、西宮市の淡水貝・カタツムリの展示や、オウムガイとアンモナイト、エゾバイの仲間、オキナエビスの仲間などもありました。

西宮市貝類館では、これまでに、標本目録を1～7号、研究報告を1～9号とともに、啓蒙冊子として“海辺からの便り”を年1回発行しています。今回の見学で、入手したかった研究報告4号（平瀬與一郎ならびに彼の日本貝類学における役割）を購入できたことに加え、“海辺からの便り”のバックナンバー全23冊を入手することができました。